

いわて防災学教室

災害から学び、災害に備える



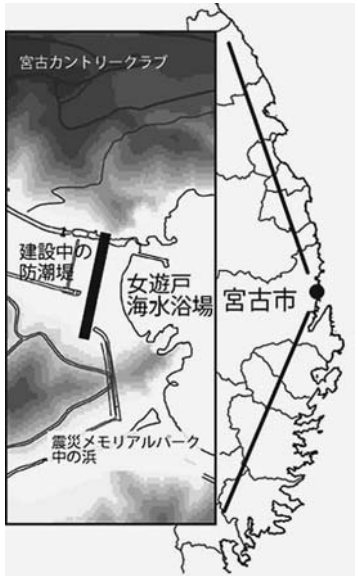
大震災から4年経過した海岸地域～宮古市女遊戸(宿漁港海岸)～

岩手大学地域防災研究センター特任助教

柳川 竜一

宿漁港海岸の北側に位置する女遊戸＝図＝には、かつて女遊戸海水浴場とその背後にT.P.+10mの防潮堤が整備されていたが、東北地方太平洋沖地震に伴う津波で防潮堤の堤体中央部が完全に破壊され、両端部は表面のコンクリートが一部剥がれ内部の土砂がむき出しの状態となった。津波は防潮堤背後に位置する水産総合研究センターの実験施設を襲うにとどまらず、海岸線から約1km内陸に位置する田畑や民家にまで達している。土木学会の津波調査グループによると、津波痕跡は防潮堤付近でT.P.+22.2mが測定されており、当時、津波水塊は完全に防潮堤を越流していた。また、津波が到達した住宅街での津波遡上高さはT.P.+14.9～17.5mであったと報告されている。

震災から1年半が経過した2012年9月、私は震災後の海岸保全施設現状調査として初めて女遊戸を訪れた。破壊された堤体部は震災直後から手つかずの状態、2011年3月当時と殆ど変わっていないようである＝写真①＝。近所に住んでいると思われるおじさんが孫の手を引いて波の音しかない静かな



宿漁港海岸の位置

海岸線を散歩している姿が印象的であった。

新たな防潮堤を設置する災害復旧工事は2013年9月から始まっており、2017年3月に完成が予定されているとのこと。

旧防潮堤は傾斜型と呼ばれる構造で、防潮堤を駆け上がりその先の海を見渡すことも可能であったが、建設中の新防潮堤＝写真②＝は堤体幅が1.8m、T.P.+14.7mの高さを有した鉛直壁型となるそうで、内陸側から海の様子が全く見えなくなってしまうことが予想される。震災前、女遊戸海水浴場は、太平洋に面した陸中海岸国立公園（現在は三陸復興国立公園に名称変更）の中でも波が穏やかで広い砂浜を有し、キャンプやバーベキューをしながら海水浴を楽しむことができる場所として家族連れや若者にも人気のレジャースポットであったそうだ。現在、地域



①壊滅的な被害を受けた旧防潮堤左岸側（2012年9月10日撮影）



②建設中の新防潮堤（2015年5月12日撮影）

住民以外は訪れる人も殆どおらず工事の機械音だけが鳴り響く場所となっているが、再び人が海を訪れ親しめる場として復活して欲しいと願う次第である。